

〈記念論文〉

子どもの育ちと身体表現の保育内容 —保育実践からの考察—

平野 仁 美

はじめに

筆者が身体表現と出会ったのは、47年前のことである。当時は、1956（昭和31）年文部省告示、幼稚園教育要領や厚生労働大臣課長通知の保育所保育指針1965（昭和40）年において、この保育内容は「音楽リズム」という名称であった。保育者養成校において、幼稚園教諭免許状と保母資格取得の教科に必修専門科目として修得すべき教科目として、筆者はこの授業内容に出会ったのである。担当教員は、阿部初代であった。阿部は、生涯を身体表現の研究に没頭し、105歳で逝くまで、筆者を身体表現の保育の魅力に誘い続けた真の恩師である。

平成元年幼稚園教育要領の改訂、2年には、保育所保育指針の改定があり、保育内容も「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域となり、大きく保育内容も変わったのである。身体表現の保育は、領域「表現」に含まれ、音楽表現、造形表現、身体表現の3本柱となり子どもの表現を支える一役を担う保育内容として、保育現場で工夫しながら実践されて来たのである。心身の成長とともに様々な能力を発揮していく子どもは、言葉や記憶や概念を獲得し、その子なりにイメージを湧かせ、目の前にないものを思い浮かべることができるようになる。そのことから、からだところを

柔軟にして動きと絡み合わせ自己の思いをあらわしたり、送ったりしながら表情の豊かさや動ける喜びが味わえるようになることが考えられる。筆者は、このような点に着目し、永年「身体表現遊び」の保育を実践し検討・考察をしてきた。

子どもが暮らす園という集団の場では、保育者によって様々な遊びが提供されている。身体表現の保育実践も領域「表現」として、幼稚園や保育所の教育内容の位置付で展開されている一つの遊びである。遊びは、子どもが自ら生みだすものと、保育者によって提供されるものがあると考えられる。保育者が遊びを提供する意図の向こうに、遊びを通して、子どもたちの発達する姿があることが考えられる。また、遊びを通して、子どもの脳を刺激し、イメージや体験の記憶を自己の身体機能を使って楽しむ遊びへと誘うことは、自己実現、創意工夫後の爽快感を味わいながら育つことができると考えられる。

身体表現の保育実践は、身体の揺り動かし、仲間からの刺激が自己の力を倍増させ、さまざまな機能を高めていくのであると考えられる。そして、おおむね何歳の育ちの幅が十分受容され、自己肯定感を育てる遊びであるといえる。本論は、子どもの育ちを身体表現の保育内容から検討し、保育実践から得た効果を1. 身体表現の保育内容、2. 身体表現は子どもの発達のどこを支えるのか、3. 身体表現の保育方法の3つについてまとめ身体表現が子どもの育ちにとって必要である点を論じ以下に述べていく。

1. 身体表現の保育内容

保育を展開するとき、子どもの発達段階を捉え、保育者の願いをもとに保育は進められる。その保育のなかで、子どもの「何を」「どのように」育てるかという発達の方向性である「心情」・「意欲」・「態度」の育ちを「ねらい」として挙げ、保育者は保育をするのである。保育内容は、保育のねら

いを達成させるために指導する事項である。子どもが環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導され、経験する事項である。このことを念頭におき、身体表現についての保育内容を以下に述べていく。

(1) 子どもの発達から保育内容をみる

保育内容は先に述べたように、子どもが環境に関わって展開する具体的な活動から経験する事項である。ねらいにつながる保育内容として、内面の心の動きを「心情」・「意欲」・「態度」からどんな体験があるのかを具体的な行動レベルを挙げていく。「心情」では、ふれる、ふれあう、親しむ、喜ぶ、感じる、気づく、知る、わかる、つたえあう、共感し合うなどのような内容がある。「意欲」は、行う、行動する、活動する、取り組む、取り入れる、接する、試す、考える、工夫する、深める、見出す、表現する、創造する、想像するなどのような内容がある。「態度」は、関わる、支え合う、協力する、やり遂げる、気付ける、守る、大切に作る、生活するなどのような内容がある。

身体表現の遊びでは、子どもが生活のなかで見聞き、想像したあらゆる事象に対する興味が“動き”というものを通してあらわされる。子ども自身の感動体験が自己の創意によって表現されるのである。この時、単に実在の“もの”を模倣してあらわすのではなく、その特徴を自分なりにとらえ、感動した経験をもとに関心のあるところを強調し、自己の体験の記憶やその子の持っているイメージから、動きを模倣したり、創造したりしていくのである。子どもは、その動きの表現を自己表出するときに、自己を開放し、想像の世界のなかに入り込んで、変身し他者になる喜びを味わうのである。そこには、現在のその子の発達が大きくその楽しみを左右するのである。

1歳を超える頃から歩行が始まり、2歳頃にはゆるやかではあるが走ることができるようになる。この頃から個人差はあるが、とぶ、おす、ひく、よじのぼる、なげる、などの全身の協応を必要とする運動が徐々にできるよう

になる。3・4歳頃には、スキップやジャンプ、高い所からの飛び降りや片足立ちもできるようになる。動きの表現は、このような基礎的運動能力の上に、律的な知覚を大筋や小筋の反応に移していく調整的な動きと結びついている。調整的な動きは、あらゆる運動と結びついているが、動きの表現は、音の刺激によって速さ、強さ、リズムの刻みや長さの持続に応じて、身体機能の動きを反応させ調整するという音と動きの協応性や律動性の発達に直接関連しているのである。

表現活動の発達をみていくと、日常的、習慣的な動作の模倣的な要因が強く働いている表現がある。この表現は、未熟でだれでもが同じような表現をしている段階であることが考えられる。次に、自己の想像や観察から動きを取り出した創造的な要因が強く働いている表現の段階がある。これは、同一題材に対して、いろいろな表現が現れる分化した段階へと発達したことが考えられる。子どもの動きの表現の対象となる題材は、性別や環境または経験によって異なるが共通の傾向としては、生活の身近的なもの、動的なもの、空間的なものが好まれ、同一題材に対しても、冒険性のある新しい動きにつながるのとらえ方が好まれる傾向にある。模倣表現は、3・4歳に多いが創意性の強まりと共に減少していくとされている。新しい事態のなかで過去の経験を融合し、より高次の表現を見出そうとする試みのなかでは、繰り返しあらかわされ、表現力を高めていくことが考えられる。保育内容の経験から、動きのとらえ方が多様に分化し、個人の工夫が明らかに動きにあらわれるようになることが考えられる。子どもが自分のとらえ方で動きを工夫できるようになったところから、創造的な表現の段階に入ることが考えられる。そのものになりきって動く感情移入の体験であり、感情を込めた動きの実現に繋がるものである。心情が育ち、意欲がわき、態度があらわれるためには、年齢発達に則した保育内容を多く経験していくことで、身体表現の保育が確実に豊かになることが明らかである。

(2) 保育形態から保育内容を見る

保育の形態は、クラスの仲間と共に同じ保育の内容を体験や経験をする一斉活動と子どもがそれぞれの興味や関心を持った遊びを一人もしくは、数人の気の合う仲間と園内のさまざまな場所で意図的に構成された環境や偶然備わっている環境に出会い遊びを展開する自主活動がある。身体表現の保育を実践するとき多くの保育者は、一斉活動の形態で保育を展開している場合が多いことが考えられる。保育者がテーマを決め、子どもがそのテーマにもとづいて、保育者の投げかけた言葉から、自己イメージを湧かせ、そのものになりきって動きを表すことを楽しむのである。動きを創り出すときは、身体部位を十分に動かして、そのものの特徴を動きによってあらわそうとするのであるが、その子の持っている感覚や生活体験が動きを送り出す源になっていることが考えられる。一斉活動に於いては、自己イメージと合わせて一緒に活動する友だちからの影響も大きく受けることがあると考えられる。子どもは、瞬間にかけられた言葉がうまく受け取れなかったとしても、友だちの動く姿から刺激を受けて動いたり、模倣して動いたりすることがあり、一斉活動で身体表現を展開するときの学びの要素の一つだと考えられる。

一斉活動を展開するとき保育実践の方法として、導入の活動、展開の活動、まとめの活動の三本柱で保育内容を構成していくのである。身体表現の保育内容でこの3つの活動を考えると、導入の活動の展開では、本日の中心テーマに誘っていく前段階として、動ける身体にするための刺激、響く心にするための刺激、考える・工夫する・イメージをわかせる・記憶をたどらせる等の脳への刺激をする体験を盛り込むのである。体育的に言うならば準備運動という活動である。展開の活動では、本日テーマとしてあげた動きの体験活動を保育者の言葉かけから、子ども自身の記憶や体験を通してイメージしたものを自己の身体機能を使ってあらわして行くのである。保育者は、このあらわしをさらに高めるために適切な言葉を瞬時に選び出し、また子どもに投げかけるのである。このやり取りの繰り返しから、子どもは、考えて

あrawし動くことや自己のイメージを工夫して身体であrawし動いたことを保育者から認められ、感動されたり、共感されたりしながら動きをあrawした喜びを体感し、満足感を得ていくのである。そして、まとめの活動において、たくさん身体を動かした後の爽快感と共に動きの振り返りを行なうことで、本日の活動内容に心地良い満足感を味わい、楽しめたことをかみしめるのである。このようなことから身体表現活動で育つ保育展開の計画や実践を通した記録が残され、一斉保育で身体表現保育を展開する効果が確認できるのである。

一方、自主活動で子どもの身体表現を体験・経験するための保育内容として考えられることを以下に記していく。一斉活動では、保育者が子どもの現在の発達や興味、関心からテーマを設定し、計画を立案してねらいを達成するために実践していくとき、保育者が子どもの活動を常に把握しているのである。自主活動では、子どもが気づき自己表現をしたとしてもそこに必ず保育者が居るとは限らない。子どもの今、学べた事実を見逃してしまうことが多いことも予測されるのである。また、友だちの感じ取ったことに気づき共有イメージを持って刺激し合って、活動することや模倣して取り組むことも非常に難しいことが考えられるのである。しかし、保育者は、自然に出会い感じて動きをあrawしている子どもの姿を見逃さずに受け止めるために常に意識して子どもの遊びの様子を見守ることが要求されるのである。一斉活動のように身体表現をする保育の設定はないが、子どもは感じ考えながら遊んでいることが推測される。このことから、子どもがどんな時にどのようなことを発見し、何と出会い心を動かし、それをどのように取り込んで自己のあrawしと結び付けていくのかを見逃さないことが自主活動には要求されるのである。

筆者が自主活動の中で子どもの身体表現を確認した2歳児の保育場面がある。それは、天気の良い秋のある日のことであつた。戸外遊びをしていた子どもの所にトンボがたくさん飛んできたのである。保育者は、子どもがどの

ように反応するのか見守っていた。一人の男児がこれに気づき、トンポになったつもりで両手を広げ、園庭をスーイスイと走っていた。その子の動きをみて、他の子もトンポになった。そしたら、その近辺で遊んでいた子もトンポになって合流したのである。本物のトンポと子どものトンポがコラボしながら園庭で動きを楽しんでいるのである。このように自主活動中でも身体表現をしている子どもの姿があることを確認した瞬間であった。

2. 身体表現は子どもの発達のどこを支えるのか

身体表現を意識して保育を展開している保育者は、子どもの身体の各部位がよく動くまたは、テーマとして投げかけたもののイメージに近く第三者が見てそれらしいあらかわしができたという結果に期待するのである。そのような状況になるためには、身体表現をすることでなにかの成長を見ることとなるのである。これが、身体表現の体験から育つことであり、心・頭・身体の育ちである。以下に身体表現をするときの要素から、子どもの育ちを考察していく。

(1) イメージを身体であらわすと何が育つ（生活体験からの記憶・認知を動きへ）

イメージとは、ある情報が伝えられたときに思い浮かべる像や情景だと言われている。動きをイメージさせたいとき像や情景を思い浮かべるヒントとなる言葉をかける。自己の身体能力を十分発揮させて動き、あらかわし方を深めてゆく時に、子どもの脳裏に生活や遊びで体験した思いが湧き、動きと結び付けて身体を動かしてあらかわし、さらに動く楽しさを膨らませていくことが求められる。それには、イメージを湧かせて動きをあらわすことができる脳や心の育ちが要求される。イメージを身体であらわすことができることで子どもは自分が体験してきた記憶をたどり、保育者が要求してくるテーマを

自己の身体機能をどのように動かすか、この身体部位をどのように動かすことでそのものの特徴をイメージと結び付けてあらわそうと考えたり、工夫したりするのである。イメージが湧かないと何をしてもよいのかも考えつかない状況になり動けないということになる。また、「これはこのようなもの」であるという認知と過去に見た体験や知っているという記憶を紡ぎながら自己の思いをとげることができ満足したり、納得したり、時には「みて、みて」と自分の工夫や考えをイメージして動きとして伝え子どもは自信をつけていくことが考えられる。

豊かなイメージが湧くためには、生活体験からの記憶が多いことが考えられる。生活体験が豊かであれば、「あれは、こうだ」「これは、こうだ」と認識することができるようになるのである。「これはこのようなもの」だと認知され、子どもは物知りになっていくのである。物知りの子どもは、保育者からの言葉かけを理解し、自己イメージを湧かせ動きへと置き換えることがしやすいのである。イメージして動きにあらわした内容は、第三者の目から観て評価されるのであるが、その動きを観た第三者もまた、自己イメージを湧かせ動きを考えているのである。そこで認められるには、あらわし手とみる者の認識が一致することにより、「いいね」「それらしいね」「よく特徴をつかんでいるね」と言うことになり、あらわし手の動きは評価されるのである。ここにイメージを動きにてあらわし、自己の思いを伝えたり、受け止められたりして第三者に伝えたり、伝わったりした感覚を獲得する喜びの実感が育つのであることが考えられる。他方に、イメージを自分なりに表現しようとする工夫や考え、気付きなどを体験できることが考えられるのである。

(2) 言葉を動きであらわすことから育つもの(4つのカテゴリーからみる)

動きを引き出す言葉をどのように設定したらよいかを検討するとき、舞踊

研究の一人者である松本千代栄の舞踊理論を参考にし、言葉の検討を行ってきた。松本は、「表現の動きを、一つは、身体の動きという運動的な角度、二つは、立体的なまとまりの空間的角度、三つには、時の流れをまとめるという時間的な角度から眺めてきた」と『舞踊美の探究』（大修館書店1957年p114）7. 形成因子の中でその性質について述べている。その内容から舞踊の形成要素を参考とし、筆者は、動きを引き出す言葉かけ分類形成をした。

筆者は、同朋福祉第23号と24号において、4つのカテゴリー、「オノマトペ」「空間」「イメージ」「動き」について、その言葉かけの意味を挙げ、各カテゴリーに見られる言葉かけの特徴や詰まっている要素について解説し、身体表現の保育展開をするときの保育者の言葉かけの重要性について述べた。ここでは、言葉を動きであらわすことから育つものについて述べていく。

「オノマトペ」は、擬音・擬態の言葉かけである。「空間」は、場の広がりを感じさせる言葉かけである。「イメージ」は、雰囲気や感覚の言葉かけである。「動き」は、身体の動かし方のヒントとなる言葉かけである。

「オノマトペ」は、「コロコロ」、「ピョンピョン」、「ゲコゲコ」、「ピョーン」などの音を意識して使う言葉である。身体表現の言葉かけとして、「オノマトペ」をよく使うが、簡単で気軽に使える。投げかけられたとき、面白いと感じる。また、感覚的であるが、リズムが取りやすい。この言葉を投げかけられると子どもは、音感覚で気楽に身体が自然と動き出してしまふ。したがって、あれこれ難しく考え込まなくても良い事や気持ちの切り替えもしやすいことから「オノマトペ」は、言葉を動きであらわやすいと考えられる。

「空間」の言葉かけでは、「花から花へ」、「どこに飛んでいくのかな」、「あちらこちらに」、「どこに転がって行くのかな」などのような場所の移動を感じ動こうとする気持ちを引き出せることが考えられる。「空

間」に見られる言葉かけの特徴は、保育実践の中で表現しながら移動していく時に保育者が投げかけることばである。言葉かけ例としては、「こちらから、あちらへ飛んで行きましょう」とか、「おいしいご飯があるから、こっちに食べにおいで」や「クンクンいい匂いあっちに何かあるみたい」のように投げかけるのが「空間」の言葉である。言葉を動きであらわすことから育つものとしては、動きの広がりや感覚や動きながら味わえる感覚が体感できる。また、ゆったりした時間感を味わうことができる言葉かけである。動きを導き出す言葉かけでは、「飛ぶよ」、「バタバタ動かして」、「ヒラヒラ舞っているね」、「上下に動かして」などのように身体の動きを促すような言葉かけである。題材の特徴を子どもが自分の身体を動かすことで、感じ取れ言葉を動きであらわすことから育つものである。その題材の生活風景を動きの言葉かけによって感じ取り身体であらわすヒントになる言葉であると考えられる。人や物の動作や作用をあらわす言葉である。詰まっている要素は、「カエル」は「カエル」のままでは動きのイメージが湧きにくい、「カエル、ジャンプ」「カエル跳ねる」「カエル跳び」と動きの言葉を付け足すことで、「カエル」は元気でいきいきした生き物となり、身体であらわす動きの要素が加わると言葉をかけられた者たちに命を授けるという特徴がある。五味太郎は、『うごきのことば（言葉図鑑（1）』（偕成社、1985年）において、「動きの言葉じたいが、動くことが好きなので、生きている言葉なのです。動きの言葉は、生き物の世界をいきいきととらえるためにある要素をもった言葉なのです」と述べている。

イメージの言葉かけとは、「足はどんな形かな」、「どんなふうに泳ぐかな」、「今日は雨の日です」のような題材のイメージが湧くような言葉かけのことをいう。動きをイメージするには、物事を理解する認知力や体験を脳裏に浮かべることができるための記憶する力、それらが言葉の発達と結びついていくことが、自己の身体機能を十分動かしてあらわすことができるようになり、言葉を動きであらわすことから育つものなのであることが考えられ

る。子どもが備えている認知力や記憶力と絡めることによって、さらに豊かになって行くものである。その子がどのような体験をして、育ってきたかがイメージを形成するには、大変重要なことであることが考えられるのである。言葉を動きで表しながらイメージする力は育まれていくことが考えられるのである。

(3) 音やリズムを感じる動きの発達（リズムの変化・心を躍らせる音・自己の身体と動き・感情を動きとリンクさせる）

身体表現遊びを豊かにしていくものの一つに、音がある。身体表現の保育を観察していると、動きのきっかけを作るのに保育者はよくチューナータンブリンを使っている。この楽器は、鈴のない太鼓である。パチを使いリズムを中心に使って動きを子どもから引き出していくのである。心地良く流れる音楽とはやや違うのだが、たたき方によってその場の雰囲気盛り上げ、表現テーマを感じさせて動きを引き出している。この他に、ピアノでその場の雰囲気を出せる曲を弾いたり、和音を巧みに弾き表現題材の動きをあらわしたりもする。また、キーボードなどから、さまざまな音響を出し表現テーマの雰囲気を醸し出し動きやすい状況を作ることとする。さらには、効果音楽として作曲された音楽をその場の状況に合わせて流すこともある。音やリズムを感じる、リズムの変化にからだを合わせる、気持ちを抑揚させて心を躍らせることも子どもが修得していく育ちである。この育ちは、動きの体験から音やリズムを感じ取り動く身体機能の発達を観ることが出来る。逆に、身体機能の育ちが音やリズムに合わせて動くという発達も身体表現の保育実践から確認できる。

子どもは、保育内容の体験や経験から、自己の思う動きをあらわせるようになって来る。自分で考えたり、工夫したりして動いたりできることを喜びとして感じ取ることは、動きの発達の効果であることが考えられる。自分の感情を動きとしてあらわしたり、友だちの動きから刺激されて、「いいな」

「すてきだ」「ああやって動いてみたい」と取り込んだりしながら自己の動きを変化させていく工夫も動きと出会って育つ感覚である。子どもは、身体表現の保育と出会い「感じ」「考え」「工夫」してあらわすことの楽しさを獲得していくのである。この時、さまざまな角度からさまざまな刺激を得て成長していくのである。「感じる心」と「あらわすよろこび」は繰り返し体験する音やリズムの受け止め方の蓄積から感じる動きの発達をみる事が確認できるのである。

（４）動くことのあらわしや体験から発達のどこを支えるのか

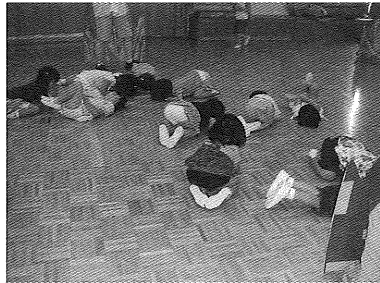
動くことのあらわしや体験は、身体機能の発達を支え、動ける喜びを味わえる心の発達を支えることになることが考えられる。動くことは、子どもにとって気持ちを満足させていくことが心を開放させることになる。また、思いっきり動いて気持ちを発散させ心地良い疲労感、爽快感を味わうことになり、心を満たしてくれるのである。心を豊かにして育つことは、自己を受け止め、自立や自律を促すエネルギーとなることが考えられる。園生活のなかで、遊びや生活をするうえで、いつも自分の思い通りに行くことばかりであるとは限らないのである。集団生活の場では、時には大きな葛藤をする場面に出会うことが予測される。そのようなとき、動くことのあらわしや体験から得た経験は、心のさまざまな育ちを支える効果があることを筆者は、保育現場での長きにわたる経験から確認しているのである。同じ空間で楽しく遊んだ体験を共有し、そこで心を通わせたり、共感したりした思いは、子どもの心に深く残っていくのである。動いて発見して、考えて実現する自己からの発信力やそれを受け止められ、認められたあらわしの体験が重要である。

3. 身体表現の保育方法

子どもは、心身の成長とともに様々な能力を発揮していく。その一部に、言葉や記憶や概念を獲得し、子どもなりにイメージをわかせる目の前にないものを思い浮かべることができるようになるのである。そのことから、からだとところを柔軟にして動きと絡み合わせ自己の思いをあらわしたり、送ったりしながら表情の豊かさや動ける喜びが味わえるようになることが考えられる。筆者は、このような点に着目し、永年「身体表現遊び」の保育を実践し検討・考察を行ってきた。

身体表現の保育実践は、身体の揺り動かし、仲間からの刺激が自己の力を倍増させ、さまざまな機能を高めていくものであることも前述して来た。

そして、おおむね何歳の育ちの幅が十分受容され、子ども一人ひとりの個性を尊重し、常に新しい着眼を大切に



<図-1>身体表現保育の場面

しながら、その子の創意工夫や着目点を褒めたり、認めたりしながら自己肯定感を育てる遊びが身体表現の方法として、保育者たちが子どもと共に表現力を高められる内容であると筆者は考えているのである。

自分の身体を思う存分動かすことや、自己イメージを動きで表現する遊びを豊かに展開していくためには、動きを模倣することや言葉のリズムを繰り返し体感することも大切だと考えられている。また、遊び環境の工夫は、子どもを表現活動に自然に引き込み、その子の“今”の育ちを大切にしながら、動く楽しさを味わいつつ、さまざまな身体部位の発達を促し、心情や意欲を育て、またやりたくなる遊びとして効果的である。

身体表現の遊びは、一見、保育者が表現題材をあらわしやすくするような言葉をかけ、子どもを意のままに操る、やらせのイメージがあると批判され

たこともある。しかし、筆者はそうは思わない。保育者が言葉をかけたらその言葉を受け止めた子どもは、どのように自己をあらわして来るのかをしっかりと見届け、感心したり、共感したり、時には驚く保育者の人となりとの交流がもたらす効果もある。さらには、日常の生活体験の幅を広げる効果もある。身体表現の保育実践には、総合的に子どもを育てる要素が詰まっており、その子らしさの発見からスタートして、子どもの可能性や素晴らしさに気づくまなごしを子どもからの贈り物として保育者は受け取り、今後の保育に活かすことができるのである。上記で示したことを筆者は、身体表現の保育実践から確認して来たのである。

(1) 模倣からあらわしへ

西洋子は、『舞踊と身体表現』（日本学術協力財団、2005年）掲載論文の中で「からだの表現・始まりの形」（p122、L5）というテーマで子どもが模倣していくことについて論じている。その中で西は、「こうした自由で生き生きとした子どものからだの表現のはじまりには、自分以外の他者やものの様子をまねる“模倣”という行為がある」と記しており、浜田寿美男著、『身体から表象へ』の「模倣の発達の流れ」（ミネルヴァ書房、2002年）を同論文において、引用し表に示している。さらに西は、「からだによる双方向的なコミュニケーションの場には、他者の動きを自分に取り込みながら、同時に自分からも同じ動きを送る共鳴動作が多く発見する。“模倣”のはじまりの形ともいえるこうした共鳴動作は、自己と他者との間に強い一体感をつくりだす役割を担っている。私たちは、この一体感に支えられながら、より親密で豊かなコミュニケーションの世界へと誘われ、それに伴い模倣もそれぞれの段階を経て発達していくのである」と述べている（日本学術会議文化人類学・民俗学研究連絡委員会編学術会議叢書11『舞踊と身体表現』日本学術協力財団、2005年）。

子どもは、瞬間にかけられた言葉がうまく受け取れなかったとしても、友

だちの動く姿から刺激を受けて動いたり、模倣して動いたりすることがある。これを繰り返すことにより自己のあらわしの力が徐々に育つのである。人の真似をすることは良くないと考えることもあるが、筆者は真似することから学びへの転換があると考え。真似ながら学び、学んだことを積み重ねることで自分らしい動きを生み出していけると考える。筆者は、あらわし体験から、動く楽しさやおもしろさを学ぶ実践をあえて模倣からのスタートとして保育に取り入れることが気楽に取り組む身体表現なのだとすることを長年の研究から確信したのである。

(2) 言葉からあらわしへ

保育者の投げかけた言葉から、自己のイメージを湧かせ、そのものになりきって動きをあらわすことを楽しむのが身体表現の保育である。身体表現内容の先行研究には、阿部初代による「発達特性と指導法」（1985）や本山益子による「動きの表現」の教材研究 - 動物を題材とした場合 -」（1989）、「動きの表現と擬音語・擬態語 - 口伴奏としての発声の多様化 -」（1991）、さらに本山と平野が行ってきた「身体表現遊びの保育内容の検討Ⅱ～Ⅴ」（2012～2016）や井上勝子他の「感性を育む身体表現」（ぎょうせい、2011）など、さまざまな角度からの研究はある。筆者の研究のなかで「言葉かけの内容分析の研究」から言葉を受けて子どものあらわしについて身体表現の保育実践から明らかにしていく。

身体表現保育を展開する時に投げかけられる言葉は、クラス集団がおおむね理解できる言葉を選びながら工夫して使われている。多くの保育者は、瞬時に子どもの状況を見て、個々がわかる言葉を選んで投げかけたり、あらわしてくる動きの確認をしたりしながら繰り返し言葉をかける。その中で、子どもがあらわす動きに対する思いを受け止めながら、待つという姿がみられるのである。保育者は、クラスの子ども一人ひとりが動きを自らあらわし、動く楽しさが味わえるように言葉かけを工夫する必要がある。また、言葉を

投げかける時には、子どもの発達状況把握が大切な要素だと理解しておくことが要求される。

自己の身体能力を十分発揮させて動き、あらかし方を深めてゆく時に、子どもの脳裏に生活や遊びで体験した思いが湧き、動きと結び付けて身体を動かしてあらかし、さらに動く楽しさを膨らませていくことが求められる。保育者の言葉かけが対面している子ども理解が十分されていないと、言葉を受け止めた子どもは、動く楽しさが味わえなかったり、自ら工夫して動こうとしなくなったりすることがあることもあるということを今まで発信してきている。子どもが言葉を獲得することによって、ものや出来事を「こういうものだ」、「ああいうものだ」と思い描き、意味づけしながら保存しておくことが動きとしてのあらかしを豊かにしているのだということも確認して来た。尼ヶ崎彬は、「人は自分の語彙の枠の中で世界を認知している」と著書『ことばと身体』（勁草書房、2002年）の中で述べている。また、同書において子どもの言葉認知について意味づけるために、「語彙が少ないとはそれだけ世界を単純にみているということである」と記しさらに、「子供の世界像はきわめて単純にできている」とも述べている。子どもは、子どもなりに少ない獲得言語を使ってものやことを認識していくのである。そのように考えると、認識の前に言葉の発達が先にあって、目の前の物を認知して溜め込んでおくのだということも明らかにして来た。認知しておくには、自分が理解できる言葉と置き換えていくことが必要で、置き換える時の言葉は少なくとも言葉で指し示し、概念化して認識していくのであろうことが考えられる。したがって、保育者が子どもにかけられる言葉は、どの程度その内容を認知しているのかを理解しておくことが要求されるのである。

動きをあらわす言葉は、日常生活の中でかなり多く使われている。例をあげると、「歩く」「走る」「寝る」「泳ぐ」「泣く」「止まる」「飛ぶ」「転がる」「あげる」「さげる」などなど、言葉図鑑にはたくさん記載されている。「動き言葉」は、動詞つまり動作をあらわす言葉である。動詞に

は、「自動詞」と「他動詞」があり「自動詞」は、「歩く」「走る」「寝る」「泳ぐ」「泣く」などのように目的語を取らない動詞のことをいう。

「他動詞」は、「読む」「見る」「書く」「飛ぶ」などのように目的語を取る動詞のことをいう。また、しっかりその動作をする人やもの、生き物があることを理解して、目的語をいれないと正しく伝わらないことがあると言われている。

身体を動かして、表現題材の特徴をあらわして動く身体表現の保育実践では、たくさんの動詞と子どもは出会い、保育者は動きを引き出す時に「動詞」すなわち「動きの言葉」をたくさん投げかけるのである。動きがイメージできる言葉を受け手の発達に合わせて、同じ言葉を繰り返して投げかけたり、違う言葉を工夫して届けたりするのである。また、表現が豊かになるような言葉を投げかける時は、動詞に限らず言葉にならない音やリズムを使うこともある。この場合、擬音・擬態語であるオノマトペを使うことがよくある。例えば、「ピョンピョン」「ゴロゴロ」「バタバタ」「スイスイ」「ドカーン」などである。これらは、言葉の未発達な乳児たちにも感覚的に受け止められている。子どもは、動きのイメージが湧き、身体を動かすリズムと出合うことで、動く・揺さぶる・跳び上がるなどの動きがあらわしやすい状況に出会うのである。動きのマニュアルがある訳でも無い身体表現保育の場合は、気楽な気持ちが起りやすく、とりあえず動いてみたら「楽しかった」、「面白かった」、「またこの感覚を繰り返し感じたい」と思う気持ちが湧き起るのである。動きと結びつく言葉を適確にかけることが、動きを引き出すとき重要なポイントとなることが考えられる。

(3) 草むらを環境にしての取り組み

筆者は、さまざまな方法で身体表現の保育実践を行ってきた。その一つの方法として草むらを環境にして広場を設定する。そして、この草むらと広場の出入りを中心に遊ぶ「草むらごっこ」と称する身体表現活動がある。



<図-2>草むら環境の設定



<図-3>「青虫」の模倣表現場面

<図-2>は、環境構成として草むらを配置し身体表現の保育実践場面のイメージ図である。

<図-3>は、青虫をイメージしやすいようにぬいぐるみを見せながら身体表現の保育を実践しているイメージ図である。

「草むらごっこ」で表現を引き出すのは、保育者の言葉かけやその気になる雰囲気や音を音の提供で作出す。子どもにとって、草むらは、安心の広がる居場所となり、夢の広がる空間なのである。そして、虚構の世界への入り口となり、現実と虚構の世界を行ったり来たりできる遊びなのである。そこには、子どもが蓄えたイメージや記憶をたどるあらかわしをひきだせる「草むら」という環境がある。「草むらごっこ」は、子どもたちの体験や、認知、イメージなどを自己の身体機能を高めながら、友だちや保育者と共感し、動きを通して自己発揮していく表現遊びとして気楽に展開できるものである。



<図-4>草むらから広場に遊びに来た場面 <図-5>動きを確認する話し合い場面

動けない子は草むらに入って友だちの動きを観察しながら、さまざまなことを取り込むのである。保育者は、子どもが自分から動き出すのをじっくり待ってあげ、草むらの中で学ぶたくさんの体験があることに気づき、子どもの学びの方法に出会い子ども理解を深めるのである。そして、生きる力の基礎はもとより、感性、工夫、創造、につながる多くの好奇心が育まれることにさらに気づくのである。「草むらごっこ」の何よりいいのは、身体を揺り動かしながら身体機能を高められることなのである。子どもは、自分のスタンプを発見し、動きながら考え、動きながら工夫し、動きながら他児を意識する。保育者は、今、目の前にいる子どもたちの感覚をきちんと受容し、発達への刺激として子どもたちに戻すなかで、子どもと向き合いながら、遊びを展開するのである。自己を受け入れられた子どもたちの目はキラキラ輝き、今度は保育者が何を言うのか真剣に聞こうとするのである。「草むらごっこ」は、子どもたちの元気を実感できる遊びだと考えられる。

ここで筆者が2012年2月に実践した「草むらごっこ」保育の実践研究を記し、保育方法の提案とする。

以下の研究は、2012年2月に保育実践され、2013年に筆者により文章化したものを引用しているため、保育所保育指針は、2008年3月告示の指針内容に適応している。

1. 研究方法

(1) 実践日：（3歳児）2012年2月10日

- (2) 対象：〈京都府〉綾部市せんだん園南保育園（3歳児クラス）

（本園において、倫理的手続きをし、個人情報や肖像権に対しての許可を得ている）

- (3) 保育実践者：平野仁美（保育現場経験33年）

- (4) 保育方法：身体表現遊び「草むらごっこ」

この保育では、ダンボールや白ボールを土台に使い、草むらの絵を描いたものを椅子または、積み木などに貼り付けておく。草むら6個を円形に配置し草むらを囲む広場において身体表現活動を展開するものである。

導入・展開部において草むらを意識的に活用し、身体表現遊びを行う。保育実践者（平野）と、表現遊びをした園の子が初対面のため、子どもの育ちを確認しながら、テーマを持って表現遊びの内容を構成する。

保育形態は、クラスの子みんなで遊ぶことを前提にしている。

※担任ではない者が保育をするのでこの形態がよいと考えられる。

- (5) 方法：保育展開を録画したDVD映像をもとに、「さまざまな子」の育ち合いを考える。

2. 「草むらごっこ」を定義する

(1) 保育方法としての「草むらごっこ」

子どもが暮らす園という集団の場では、保育者によって様々な遊びが提供されている。「草むらごっこ」もそのなかの一つの遊びである。遊びは、子どもが自ら生みだすものと、保育者によって提供されるものがあると考えられる。保育者が遊びを提供する意図の向こうに、遊びを通して、子どもたちの発達する姿がある。「草むらごっこ」は、領域「表現」のなかの身体表現の遊びとして、現場の保育者が身体表現の遊びに取組みやすい要素をたくさん盛り込んでいる。また、保育者の置かれている状況やその保育者の感性や

豊かさが、子どもの脳を刺激し、イメージや体験の記憶を自己の身体機能を使って楽しむ遊びへと誘うのである。そこにかかわる、おおむね何歳の育ちの幅が十分受容され、自己肯定感を育てる遊びであると考えられる。子どもは、草むらごっこを楽しむ中で、身体の揺り動かし、仲間からの刺激が自己の力を倍増させ、さまざまな機能を高めていくのであろうと考えられる。自己実現、創意工夫後の爽快感、年齢のおおむねの発達をおさえた言葉かけや遊びの展開は、子どもたちの発達にとって、大きな効果をもたらすものである。「草むらごっこは」以上のような要素を内在し、子どもの育ちを支える保育方法の1つであると考えられる。

(2) 保育環境としての「草むらごっこ」

「草むらごっこ」が誰でも、いつでも、どこでもできるのは、草むらの環境があるからである。環境構成の3つの柱をから「草むらごっこ」展開時の環境構成内容をあげておく。

1) 物的環境

①草むら・・・6～8個、②タンブリン、チューナータンブリン、効果音、カセットデッキ、ピアノ、キーボードなど、③新聞紙、布、ボール、人形、絵本など

①は、待避場所、夢を育む場所、思考する場所、友だちの動きを取り込む場所としての位置づけである。

②は、動きやすくする音響、リズムを取りやすくする打楽器、そのものになりきりやすい雰囲気盛り上げる意図的な効果である。③は、表現を引き出しイメージ付けしやすくする教材である。

2) 人的環境

①保育者と一緒に遊ぶ友だちの姿は、表現を工夫したり、自己イメージを表したりしていく刺激となる環境である。友だちが工夫して動いている姿であったり、動きを楽しそうにあらわす姿であったりが自己表現の工夫を誘う

人的環境となる。

3) 空間の広がりや雰囲気という環境

①草むらの置き方の工夫（草むらで取り囲む広場を設ける）で草むらの雰囲気を作る。

②音や効果音によって表現題材に“なりきりやすい”雰囲気をかもしだす。

③安心・安全の空間としての環境

①は、場所設定がかもしだしてくる草むらの雰囲気を味わうことで、表現題材をあらわしやすくするものであると考えられる。

②は、動きやすい音の提供により身体を動かしたくなる雰囲気をかもしだすことである。

③は、命が守られ養護の行き届いた環境を保障することが身体表現の遊びにおいても必要であると考えられる。また、自分の居場所を保障し、落ちつきや安定を得られやすい場である。友だちの動きをみて取り込む創造の空間であることも意図したい。

(3) 発達過程を基盤にした「草むらごっこ」

1) 2歳児の発達過程を意識して行う展開（下線は、筆者による）

①動ける身体を実感して遊ぶ

おおむね2歳児の発達の姿は、保育所保育指針（2008年3月告示）第2章—2発達過程（4）において、「歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。それに伴い、食事衣類の着脱など身の回りのことを自分でしようとする。また、排泄の自立のための身体機能も整ってくる。発声が明瞭になり、語彙も著しく増加し、自分の思考や欲求を言葉で表出できるようになる。行動範囲が広がり探索活動が盛んになる中、自我の育ちの表れとして、強く自己主張する姿が見られる。盛んに模倣し、物事の間の共通性を見いだすことができるようになるとともに、象徴機能の発達により、大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる」と述べられてい

る。

上記のような発達の姿を意識したとき、「草むらごっこ」では、動ける身体を実感して遊ぶ保育展開を組み立てることが必要であると考えられる。

（ラインは筆者が、身体表現に必要な発達の姿を示したものであると確認した部分である。以下の年齢も同じ意味を持つ）

②草むらごっこの展開のポイント

発達過程の内容を意識して、2歳児の保育の組み立てを考えると、歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能の発達が、動ける喜びに繋がることだと理解できる。草むらの出入りを中心に、身体をたくさん動かして遊ぶ心地よさが味わえる内容を工夫することが必要である。

あまり複雑ではない簡単な動きを繰り返すことで、確実に身体機能が高まっていけると考えられる。わかりやすく、確実に動くことで、動ける身体を実感していくことが大事である。

動きと合わせて、言葉を繰り返し聞き、自分のすることが明確になっていくのである。このことが、自我の育ちを支え、模倣して取り込み、切り替えて外に出す面白さを知り、受け止めてもらえることが象徴機能を発達させていくのであると考えられる。

心を開放させて、思う存分動く楽しさを十分味わわせていくのに「草むら」を大いに活用したいものである。

2) 3歳児の発達過程を意識して行う展開（下線は、筆者による）

①“みたて”と繰り返しの遊び

おおむね3歳児の発達の姿は、保育所保育指針（2008年3月告示）第2章—2発達過程（5）において、「基本的な運動機能が伸び、それに伴い、食事、排泄、衣類の着脱などもほぼ自立できるようになる。話し言葉の基礎ができて、盛んに質問するなど知的興味や関心が高まる。自我がよりはっきりしてくるとともに、友達との関わりが多くなるが、実際には、同じ場所で同じような遊びをそれぞれが楽しんでいる平行遊びであることが多い。大人の

行動や日常生活において経験したことをごっこ遊びに取り入れたり、象徴機能や観察力を発揮して、遊びの内容に発展性が見られるようになる。予想や意図、期待を持って行動できるようになる」と述べられている。

上記のような発達を意識したとき、「草むらごっこ」では、みたと繰り返しの遊びを意識した保育展開を組み立てることが必要であると考えられる。

②草むらごっこの展開のポイント

象徴機能の発達を意識して“みたと”“つもり”の世界を楽しむのに“草むらに住んでいるもの、隠れているもの”が広場に遊びにきては、草むらにもどる。次に、草むらから遊びに来たものは違うものになって出てくる。みたと繰り返しの遊びは、この時期の子どもが遊びを楽しむ要素として必要不可欠だと考えられる。

3) 4歳児の発達過程を意識して行う展開（下線は、筆者による）

①経験の再現と再統合を意識して

おおむね4歳児の発達の姿は、保育所保育指針（2008年3月告示）第2章—2 発達過程（6）において、「全身のバランスを取る能力が発達し、体の動きが巧みになる。自然など身近な環境に積極的に関わり、様々な物の特性を知り、それらとの関わり方や遊び方を体得していく。想像力が豊かになり、目的を持って行動し、つくったり、かいたり、試したりするようになるが、自分の行動やその結果を予測して不安になるなどの葛藤も経験する。仲間とのつながりが強くなる中で、けんかも増えてくる。その一方で、決まりの大切さに気付き、守ろうとするようになる。感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えられたり、我慢ができるようになる」と述べられている。

上記のような発達を意識したとき、「草むらごっこ」では、経験の再現と再統合を意識して保育展開を組み立てることが必要であると考えられる。

②草むらごっこの展開のポイント

上記の発達の姿から、経験の再現と再統合を意識し、身体表現の遊び展開を考えると、4歳児の目が輝き、集中する姿や動きの工夫が見られるようになるのである。また、みんなで一緒にする遊びや保育者の投げかけに耳を傾け、考えたり、工夫したりしながら自分の身体を十分使って表現しようとする姿が現れるのだと考えられる。

自己の育ちの体験と結びつく題材は、イメージがわき、友だちの動きを取り込んで、自分の動きに変化をつける手がかりにもなる。また、表現題材の選択肢を子どもに委ねることもできるようになる。子どもが遊ぶさまざまな場面で、動く喜びや身体で現す面白さ、人や物にかかわる喜びを感じる心が育つための条件をそろえることが大切だと考える。

4) 5歳児の発達過程を意識して行う展開（下線は、筆者による）

①オノマトペを用いた動きの表現

おおむね5歳児の発達の姿は、保育所保育指針（2008年3月告示）第2章—2発達過程（7）において、「基本的な生活習慣が身に付き、運動機能はますます伸び、喜んで運動遊びをしたり、仲間とともに活発に遊ぶ。言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。さらに、遊びを発展させ、楽しむために、自分たちで決まりを作ったりする。また、自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いや考えを認めたりといった社会生活に必要な基本的な力を身に付けていく。他人の役に立つことを嬉しく感じたりして、仲間の中の一人としての自覚が生まれる」と述べている。

また、おおむね6歳児の発達の姿は、保育所保育指針（2008年3月告示）第2章—2発達過程（8）において、「全身運動が滑らかで巧みになり、快活に跳び回るようになる。これまでの体験から、自信や、予想や見通しを立てる力が育ち、心身ともに力があふれ、意欲が旺盛になる。仲間の意思を大切

にしようとし、役割の分担が生まれるような協同遊びやごっこ遊びを行い、満足するまで取り組もうとする。様々な知識や経験を生かし、創意工夫を重ね、遊びを発展させる。思考力や認知力も高まり、自然事象や社会事象、文字などへの興味や関心も深まっていく。身近な大人に甘え、気持ちを休めることもあるが、様々な経験を通して自立心が一層高まっていくと述べられている。

上記のような発達の姿を意識したとき、「草むらごっこ」では、オノマトペを用いた動きの表現を保育展開のなかで組み立てることが必要であると考えられる。オノマトペの投げ掛けを中心とする保育展開は、保育者の余分な言葉かけをさけ、子ども自身が言葉を受けとめ、感じ、考える状態を提示することになる。自己の経験や体験のなかで培ってきたものを、イメージしあわす。自分から、〇〇する主体性が「草むらごっこ」を通して身につけたい教育的学びである。

②草むらごっこの展開のポイント

この時期の子どもたちの旺盛な好奇や意欲、思考力や認知力の高まり、自然事象や社会事象への興味関心の深まりを意識した題材の選定は、遊びの楽しさをより実感できるものとしていくとだと考えられる。言葉が巧みに使えるようになり、言葉からイメージをわかせる、自己の身体を思う存分使って、投げかけられた題材を表現しようとするのがこの時期の子どもたちの姿である。また、見たこともないものや感覚的に知っているものや形に表すのが難しいものでも、自分なりに工夫して表すことができるようになるのである。子どもだからこそその感覚を持っていて、大人ではあらわせないようなものでも、さらっと難なく、あらわしてしまうこともあり保育中にとっても感動したり、驚かされたりする場面にたびたび遭遇するものである。柔軟な頭、心から子どもならではの面白い動きを発見するのである。子どものこんな面を身体表現の遊びにしてみたのが、オノマトペを用いた動きの表現だと考えられる。ここでは、動きが変化していく時の場面転換や動きのマンネリ化を回避

する時のきっかけに草むらを使っていけばよいと考えている。

草むらの魅力は、奥深く多様である。草むらの設定により、表現を紡ぎだす魔法の庭が出来上がるのであると考えられる。年長児になると概念も育ってきて、「こうあらねばならない」「これは、こういうものだ」等と、現実世界から虚構世界へ、“行きつ、もどりつ”して多くのことをメルヘンの世界に置き換えて、遊びが楽しめる子が多くなってくる。その反面、現実から離れられない子や想像の世界で遊べない子の存在にも出会うことがしばしばある。「草むら」があることで、このタイプの子はずいぶん気楽に遊びへの参加ができるようになることを発見できた。このとき、「草むら」は、他児の動きを取り込む観察基地として存在し、心と身体と頭の調整をとってくれる場所となるのである。

他に、言葉と身体表現の楽しい感覚を味わわせてくれる、オノマトペを用いて動きを作り出す体験場面においても、「草むら」が基地となる。自己の感覚で、あらわした動きを誰からも否定されない、何でも有りの動きの楽しみ方を「草むら」から登場することで、動きの変化が味わえるのである。ここには、自分らしい動きの表出や創造する動きの工夫ができる子どもを発見することができ、「草むら」の存在に支えられる子どもを理解し、「草むらごっこ」を展開していくとよいと考えられる。

(4) 「草むらごっこ」とは

身体表現遊びは、心の開放ができ、自分らしい自分との出会いがあることを発見する。仲間を意識した園空間での活動は、自己の世界だけではなく、他者の世界を見聞きする機会も多くある。人を意識しながら、自己の身体と動きの関係を感覚的にとらえ自ら発信もできるのである。架空の世界を楽しめ、他者になる喜びが味わえ、自己の夢を育む土台を築き、臨機応変な感性や感覚が育つ保育内容であると考えられる。

「草むらごっこ」は、自己の育ちの体験がもとになって、表現したことが

ワンランクアップの思考を得られるようになる要素を「草むら世界」が支えているのである。また、動くことで自己の様々な機能を刺激し、身体機能や5感を高められる要素も含んでいるのである。草むらは、時に動けない子の気持ちを支える居場所（心のよりどころ）にもなるのである。草むら効果を生かし、子どもの表現を大切に見守り、遊びが有効に発達に結びつく刺激の提供をしている、保育者の存在の重要性も伝えてくれる遊びである。

3. 「草むらごっこ」の実践からの検討

前章において「草むらごっこ」が子どもの身体表現を豊にする遊び内容であることを述べてきた。平野は、2007年から身体表現遊びにおいて、「草むらごっこ」が有効的な保育方法の1つであることを紹介することを目的に、愛知県を中心とした8市町村32園の2歳児クラスから5歳児クラスにおいて実践活動に取り組み現在もお続行中である。以下に、2012年2月までの実践をもとに検討・整理したものを記載する。

(1) 環境としての「草むら」

「草むら」は、表現を引き出す題材としては非常に効果があると考えられる。平野は、現在に至るまで45年ほど身体表現の実践研究を行ってきた。そのなかで、今回、注目している「草むら」と同じように、子どもから身体表現の動きを引き出す環境として使用したものや道具には、トンネル、不思議なドア、魔法のお家、岩、大きなたまご、おもちゃ箱、魔法の粉が出るタンプリン、変身バトン、動物お面、新聞紙、変身布などさまざまなものがある。

例えば、動物になりやすいように着けるお面では、それを着けることで、子どもは気持ちの切り替えがつきやすくなり、そのものになりきって動きやすいことが確認できる。しかし、お面は兎になりきるときは兎のお面、熊になりきるときは兎のお面では熊になって動くのにやや抵抗があるのである。子どもは、題材と同じものが用意されていないとその気になりにくいのだと

考えられる。

そこで、もう少し使い勝手のよいものをあれこれ使用して保育を展開してきた。トンネルは、くぐることで動きを切り替え、題材の変化にはとてもよかったが、低年齢向で題材を深く表現するには不向きであった。また、魔法のお家は、少人数で遊ぶには適していたが装置も大きくなり、どこにでも移動してすぐに遊びだせるというには無理が生じ一定条件のものならば効果があがるものであった。

「草むら」は、トンネルや魔法のお家と同じ役割をすると考えられる。利点をあげると、「草むら」を拠点として、さまざまなものになりきる（変身する）ことができる。遊びの必要に応じて位置取りを変化できる。さまざまな園に移動して保育を展開する環境が作りやすい。表現をはじめて体験をする子どもにも抵抗のない環境を提供できるなど、非常に使い勝手がよいのである。また、表現が滞り面白くないと子どもが感じたとき、「草むら」にもどることによって、動きを変化したり、工夫したり、考えたりできる居場所の提供になるのである。一方、保育を展開する保育者は、子どもの表現がこれ以上深まって行かない行き詰まりを感じることもある。また、子どもの動きが活発になると、把握しきれず保育の方向が保育者の意図とズレ出してしまうことを感じることもある。こんなとき、保育者は「草むら」を活用するとよいと考える。一度子どもを「草むら」にもどし、子どもの気持ちをしずめたり、休息を取らせたりしながら子どもをよく観察し、気持ちを切り替える必要が保育者にも必要である。保育のゆくえを確認したり、整理したりするとき「草むら」を活用すると、保育を見失わずに展開できると考えられる。「草むら」環境は、表現する子ども側にとっても、表現を引き出す側の保育者にとっても使い方しだいでさまざまな効果を内在した環境である。

(2) 保育展開を録画したDVD映像をもとに、「草むら」で遊ぶA君の育ちを考察する。

〈事例〉3歳児クラスの広汎性発達障害児A君の育ちから

3歳児は、繰り返し面白いと感じ、「草むら」からの出入りが楽しめるようになる。「草むら」があることで、安全基地的な役割を担い、動き題材を切り替えやすい効果がある。イメージがわかりやすい動物や虫などの住み家として、「草むら」は表現を豊に引き出せる効果を内在しているのである。この時期、動くことを楽しみ自分なりの表現をすることや保育者の言葉かけを聞き、題材のイメージをわかせて動きをあらわしてることが楽しめるようになるという心情の育ちを保育のねらいとしてあげることが多い。内容としては、見たものを模倣して動く経験や体験をあげ、保育を展開することで動くことへの意欲も増してくることが確認できる。

この日の保育は、3歳児の発達を意識した保育展開を試みている。このクラスの子は、平野と初対面であるにもかかわらず、集中して遊びを楽しみながらよく動いている。注目したいのは、広汎性発達障害児A君の動きと保育への興味や参加の状態、表現をA君なりに体験している姿である。一斉活動に参加しているA君は、一見、自己中心的な動きを繰り返しているように見える。保育を展開している平野は、DVD映像からはA君を視野に入れて保育しているようには見えないが、A君が他児と同じフロアーに居てくれることで、「草むらごっこ」が与える影響として、視覚、聴覚、皮膚感覚、からも伝わり、きっと取り込みA君が青虫となって動きを表してくれることを期待していたのである。時間経過とともに、「草むら」の出入りにA君は参加し、自分らしく身体機能を使い参加している姿がうかがえる。青虫を横目で見ながら確認し、時間経過とともにA君が軽く関わりを持ちだした姿も確認できる。“のびる”、“ちぢむ”という動きを友だちの動く姿をみて取り込み、その刺激により青虫になって動いているA君の姿を確認した。また、「草むら」から他児の動きをみている状態があったことも確認できた。時間のズレを生じながらも行動基地を「草むら」としながら動き、青虫への興味を高めていったA君の変化を発見できた。このことは、繰り返し、青虫をあらわす他児の姿が、確実にA君が青虫をあらわす刺激となったと考えられる。最後

に、担任のもとに青虫になって這っていくA君をみて、待ったかきがあり、保育者としての喜びを平野自身も感じる事ができた。また、A君らしく身体表現を楽しめたことが確認でき、「草むら」環境の効果や「草むらごっこ」として保育を展開したことで、A君の育ちは、「草むらごっこ」の体験から得られた結果だと考えられる。

本稿では、集団保育に参加しにくかった子が友だちの遊ぶ姿を刺激として、「草むらごっこ」を体験したことにより、自分らしく参加しながら青虫の動きを主体的にあらわした事例をあげた。

集団の場で過ごしにくい子どもたちは、保育者が保育の工夫をすることや子どもたちにわかりやすいことばを投げかけていくことが望まれる。子どもたちの今を適確に受け止め、丁寧に寄り添う存在として保育者に要求されることは多様であることがわかった。「草むらごっこ」は、子どものありのままを引き出し、動きを保障する身体表現の保育方法として、有効な方法であると今回の事例においても確認できた。

おわりに

本論は、子どもの育ちを身体表現の保育内容から検討し、保育実践から得た効果を1. 身体表現の保育内容、2. 身体表現は子どもの発達はどこを支えるのか、3. 身体表現の保育方法の3つについてまとめ身体表現が子どもの育ちにとって必要である点を論じてきた。

身体表現の遊びは、多くの領域を集結させ子どもが育まれる要素を内在しているものと考えられる。子どもたちの笑顔や元気がこの保育を展開するとたくさん味わえるのである。保育者側から述べれば、保育展開中に、今、このときの子どもの育ちを確認することができるのである。だから、多くの学びを提供できる遊びだと考えられる。子どもは、動いて5感を十分刺激して育てることが、心・体・知を豊かにする学びの1つである。身体表現

は、見る・聞く・動く・考える・工夫する育ちを認めることができる総合的
学びにふさわしい要素が包含されている。身体表現の保育実践を通して、多
様な経験内容を子どもは体験できることから、身体表現を意識的に保育計画
に組み込んでいくことが大いに望まれるのである。

<引用・参考文献>

- ・松本千代栄著『舞踊美の探究－舞踊理論と指導法－』大修館書店（1957年）
- ・阿部初代著『音楽リズム幼児の身体表現－発達特性と指導法－』清水印刷（1985年）
- ・五味太郎は監修『うごきのことば：言葉図鑑（1）』偕成社（1985年）
- ・本永定正作『がちゃがちゃどんどん』福音館書店（1986年）
- ・佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『表現者として育つ』東京大学出版会（1995年）
- ・ひろかわさえこ作『ぶちぶち』アリス館（2000年）
- ・立川昭二著『からだことば』早川書房（2000年）
- ・尼ヶ崎彬著『ことばと身体』勁草書房（2002年）
- ・浜田寿美男著『身体から表象へ』、ミネルヴァ書房（2002年）
- ・麻生武著『身ぶりからことばへ』新曜社（2002年）
- ・日本学術会議文化人類学・民俗学研究連絡委員会編学術会議叢書11『舞踊と身体表現』掲載論文：西洋子著「子どもの身体の表現」日本学術協力財団（2005年）
p120～P130
- ・西洋子他『子ども・からだ・表現～豊かな保育内容のための理論と演習～』市村出版
（2003年）
- ・谷川俊太郎作『もこもここ』文研出版（2005年）
- ・加藤繁美他『5歳児の協同的学びと対話的保育』ひとなる書房（2005年）
- ・田守育啓著『オノマトペ・擬音・擬態語を楽しむ』岩波書店（2006年）
- ・やまだようこ著『ことばの前のことば』新曜社（2006年）
- ・那須川知子・高橋敏之編著『保育内容「表現」論』ミネルヴァ書房（2006年）
- ・花原幹夫編『保育内容表現』北大路書房（2006年）
- ・榎沢良彦編『保育内容・表現』同文書院（2007年）
- ・平野仁美口頭発表『子どもの身体表現を支える人的環境』日本保育学会第60回大会
論文集（2007年）pp908-909
- ・厚生労働省告示『保育所保育指針』（フレーベル館）（2008年）pp10—11

子どもの育ちと身体表現の保育内容

- ・久富陽子・梅田優子『保育方法の実践的理解』萌文書林（2008年）
- ・西洋子他『子ども・からだ・表現－豊かな保育内容のための理論と演習』市村出版（2009年）
- ・今井和子監修『2歳児の育ち辞典』，小学館（2009年）
- ・青木理子他『新訂豊かな感性を育む身体表現遊び』ぎょうせい（2011年）
- ・北野幸子・角尾和子・荒木紫乃編著『遊び・生活・学びを培う教育保育の方法と技術・実践力の向上をめざして』，北大路書房（2011年）
- ・本山益子・平野仁美ポスター発表『身体表現遊びの保育内容の検討－2～5歳児クラスでの「草むらごっこ」の実践から』，日本保育学会第64回大会論文集（2011年） p294
- ・平田智久・小林紀子・砂上史子『保育内容「表現」』，ミネルヴァ書房（2011年）
- ・西洋子他『子どもの身体表現～からだところ・あらわしてあそぼう～』市村出版（2012年）

（本学准教授：保育内容総論）